

曲説フランス文学

渡辺一夫



筑摩叢書 265

筑摩叢書 265

曲説フランス文学

渡辺一夫



筑摩書房

INNOCENT BLOOD

by P. D. James

Copyright © 1980

by P. D. James

First published 1982 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

Elaine Greene Limited

through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

検 印
廃 止

罪なき血

昭和57年4月30日 初版発行

著 者 P・D・ジェイムズ

訳 者 青 木 久 恵

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(254)1551(代)

振替 東京・6-47799

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

定価 1500円

0097-903930-6942

目次

新序	1
小序	4
旧序	6
I 狂信と寛容	
1 人間の二つの型	13
2 悲劇の人・カルヴァン	24
3 人の在り方を探るモンテーニュ	33
II へそ曲がりの精神の一例	
「笑い」の制裁をくだしたジョワシャン・デュ・ベルレー	44
III 生命短し恋せよ乙女	
1 フランス国語になろうとするフランス語	54
2 中世の恋愛詩とピエール・ド・ロンサールの恋愛詩	65
IV サロンと文学	
1 中世紀	77
2 十六世紀	86

3	十七世紀……………	94
---	-----------	----

V モラリスト文学

1	モラリスト文学とは？……………	103
2	ラ・ロシュフウーコーとラ・ブリュイエール……………	108
3	古典文学とモラリスト文学……………	114

VI 伝統と進歩

1	昔の人と今の人……………	124
2	「古代人・近代人優劣論争」……………	131

VII 色々な啓蒙

1	ピエール・ペールとフォントネル……………	140
2	モンテスキューとデイドロ……………	148
3	ヴォルテールとルウソー……………	153
4	ヴォルテールの場合……………	158
5	ルウソーの場合……………	164

VIII 続・サロンと文学

十八世紀の「サロン」……………	173
-----------------	-----

IX デスデモナのハンケチ

	X	ある情熱の記録	188
		ロマン主義（ロマンチズム）とシェイクスピア	195
	XI	続・へそ曲がりの精神	
	1	ロマン主義文学について	204
	2	アルフレッド・ド・ミュッセの場合	210
	XII	科学と文学	
		バルザックやゾラのこと	219
	XIII	仰ぎ見る高嶺の花の幻	
	1	シャルル・ボードレー	232
	2	ヴェルレーヌとランボーとマラルメ	237
	XIV	理想と現実	
	1	愛国心と人間愛	248
	2	モリス・バレースの『コレット・ボドーシュ』と ヴェルコールの『海の沈黙』	254
	XV	二つの生き方	
		サルトルとカミュ	268

XVI

結びの言葉

中世フランス語と中世フランス文学 283

解説（中村光夫） 302

人名・作品・事項索引 卷末
1

新序（一九七四年）

本書は、一九六一年に光文社から出版された『へそ曲がりフランス文学』に訂正補加を施し、『曲説フランス文学』と改題して一九七〇年に筑摩書房刊の拙「著作集」第八巻『フランス文学雑考』（下巻）に収録したものに更に補筆したものである。

拙「著作集」に収めた折には、光文社版にかなりの補正を加えたが、フランス文学全般に対する私の理解力の限界を染々感じ、私の能力の不足から、本文中に組み入れられなかったもので、しかも、触れずには通れない重要な事項の在所を、思いつくままに、「附記」という形で各章末に記した。これは体裁をつくらった私の「限界告白」と言われてもいたし方ない。

今度版を改めるに際しても、本文には勿論かなりの量の訂正補加がなされたが、新しい「附記」即ち新しい「限界告白」をも加えねばならなかった。筑摩書房版に添えた「附記」には（一九七〇）と年号を記して置いたから、本書に新たに添えた「附記」にも（一九七四）という年号を文末に記入した。この四年間に私が若干でも進歩していればと思ったが、別にその形跡はないように思ったし、新たに加えた「限界告白」がどの程度に意味があるものかも判らないが、旧稿を少しでも補う機会が与えられたことはありがたかったと思っている。

私は、しっかりした史観を持ち、各時代の特色や、各作家及び作品について十分な理解がない限り、文学史のごときものは書けないと思っているから、フランス文学史として本書を編んだのではなかった。ただ、今まで読み漁った作品や研究書を通じて私の眼に映じただけのフランス文学の眼鼻立ちを、極めて我流に描いてみたにすぎない。しかも、この「極めて我流」というのは、フランス文学の滔^{とく}滔^{とく}たる潮流を茫然として眺めているうちに、私の注意を惹きたいいくつかの主題だけを取りあげ、それを軸にして、各時代各作家を瞥^{べっけん}見するという遺^{やうた}方で記述したことを意味する。私が理解できないままに見逃してしまった主題もあるに相違ないし、触れられてしかるべき作家作品も沢山残されていることも確かであろう。その上、私が一応理解したつもりになっている主題や作家作品についても、専門研究家の方々から見れば、一知半解な考察や附け焼^や刃^ばめいた感想と思われることしか述べられていないかもしれない。

従って、本書は、豊かなフランス文学のなかから限られた能力しかない私が汲み出した僅かなものを勝手に並べたものにすぎず、「これだけのことしか判らなかった」と告白する記録に外なるまい。

尚、本書では、現代フランス文学について、ほとんど触れられていない。それは、私の怠惰のためでもあるが、老耄の結果関心を抱きにくいためでもある。従って、本書は、時代遅れな雑文集と言われてもいたし方ない。

光文社版、筑摩書房版のために綴った「旧序」(一九六一年)と「小序」(一九七〇年)とを敢えて採録したが、私一個の思い出のためである。見逃していただきたい。

本書が今度改版されるに当って、佐藤輝夫先生の間接な御推^{ごすい}挽^{ばん}があったかに伺い、恐縮している。

渡辺 一夫

著者に代って

この度、はからずも筑摩書房から『曲説フランス文学』が、叢書として発刊されることになりました。これは丁度十年前、同書房から出版されました「著作集」(第八卷)に収録され、その後カルチャー出版社の「フランス文学シリーズ」中の一冊としても、刊行されて居ります。

このカルチャー出版社版が上梓されます折、訂正、補加する機会を得ましたことを、著者自身、大変に喜び「序文」の中にもそれを記して居ります。

さて、今回、前述のように再びこのような好機に恵まれました。勿論、今も在世して居りますなら、欣んで、改めて「再新序」とでもして、気になる個所に補正、補筆を加え、新たに「限界告白」を述べたでございましょう。今は、それもありませんので、カルチャー出版社から刊行されました際と全く同じ内容で、体裁だけを新しくいたしました。

何時ものことながら、二宮敬先生には、ご多忙のところを全部お目を通して頂き、本当に恐縮いたして居ります。また、筑摩書房の淡谷淳一氏には、いろいろお骨折り頂きました。なお、中村光夫先生が、前回カルチャー出版社版にお寄せ下さいましたご解説は、そのまま転載させて頂きました。お三方に心からお礼申し上げます。(一九八〇・一・二七)

渡辺 芳枝

小序（一九七〇年）

この『曲説フランス文学』は、約十年前の一九六一年に、光文社から上梓された『へそ曲がりフランス文学』に加筆訂正を施したものである。

大学を出たばかりの青臭い頃（一九二五・六年）から、「老齡その任に耐え」なくなつて東大を辞任するのが目前に迫つた時（一九六一年）まで、私は、フランス文学を実に勝手な嚙り方をし続け、そして「野老曝背」の姿になつてしまつた現在にも及んでいるが、一九六一年頃、何か自分の生活に一区切りをつけられるような氣もしたせい、それまで嚙りつき、しゃぶり放題のことをしてきたフランス文学から一体自分は何を汲み出せたのであろうか？ また、自分の齒が立ちそうもないと判つたことが、どれほど沢山あるものか？ というようなことを、ぼんやり反省し始めていた。

その時分、旧友の神吉晴夫氏（当時光文社社長）が、それほど自分というものを確かめたいのなら、「フランス文学入門」とでもいうようなものを書いてみたら、自然と判明するだろうと言われた。そして、輕薄な私は、その氣になつてしまつた。

私は、正面切つて「文学史」を書く柄ではないことぐらいは心得ていたから、私の限界を明らかに示すことによって、限界を越えたものが数限りもなくあることを告白するという方法を採らざるを得

なかった。そして、できあがったものは、私が期待する以上に「反面教師」的な結果となり、私の限界だけを自虐的に露呈することにもなってしまった。

私は初めから、「フランス文学史」などという題をつける意志はなく、「フランス文学世間^{ばなし}噺」とか「曲説フランス文学閑談」とかいう題にしたかったのであるが、神吉氏は、決して臍^{へそ}曲がりではない私の心情を無視して、「へそ曲がりフランス文学」という題にすることを要望された。私は、その時既にやむを得ぬ家庭の事情から印税を前借していた関係もあり、神吉氏の要請を無下に斥ける勇気がなかった。

今度本巻（筑摩書房刊、拙「著作集」第八巻『フランス文学雑考』下巻）に収録するに当って、全然別な題にするのもいかがかと思ひ、初め意中にあった「曲説」という但書を本題として用い、「へそ曲がり」は除き去った。

尚、「へそ曲がり」という書名が附けられたに際しての神吉氏との交渉は、旧著に添えられていた次の「旧序」（まえがき）中に略記してある。（Oct. 1970）

旧序（まえがき）（一九六一年）

ずいぶんふざけた題がつけましたが、私は初め「曲説フランス文学」ぐらいでは、どうかしらと思
って居りましたのに、神吉晴夫氏が、「へそ曲がり……」という題を選び、これが大変同氏のお気に
召しているのだと伺い、この前光文社から出してもらった『うらなり抄』にも、神吉氏が、「おへそ
の微笑」という副題をつけてくださったことを思いだし、神吉氏は、よほど、「おへそ」がすきらし
いと思い、笑いだしました。「カッパ・ブックス」の親分なら、カッパがなにをねらうのが好きか、
ご存じの筈なのに、「おへそ」ばかりお好きだとは、「かみなり・ブックス」でも、別に計画して居ら
れるのかと、からかいたくになります。

しかし、私は、自分自身を、あまり「へそ曲がり」とは思っていないません。ましてや、本書中で触れ
たような貴重な「へそ曲がりの精神」が、私に十分あるとは思われません。ですから、「へそ曲が
り……」という題は、神吉氏が私を誤解して居られることを示します。

私が初め、「曲説……」としようと望んだについては、次のような経緯がありました。

徳川時代に、滝沢馬琴という文学者が居り、正史・史実を踏まえて、たとえば『権説弓張月』ちんせつゆめはりつきなど
と題して立派な作品を書きました。私の場合、厳然として存在するフランス文学史を通じて、辛うじ

て判ったつもりになったことだけを、なるべく判りやすく書き綴ったのが、雑文集に近い本書になったにすぎません。馬琴が「椿説」^{ちんせつ}なら、こっちは「珍説……」とでもしたほうが適當とは考えましたが、「珍説」では、穩かでないような氣もいたしましたので、正直に「曲説……」といたしたいと思つたのでした。

当り前のことですが、人間には判ることしか判らないという実に平凡な真実が、私にもあてはまるのです。人間は、各々、異つた父母から生れ、異つた生活環境で育てられ、異つた師友を持ち、異つた本を読み、異つた趣味・經驗を持つて成長いたします。個人個人は、お互いに人間であるという確実なようで曖昧な最大公約数を信じて生きていますが、各個人の持つ問題は、銘々異なる筈ですし、一つの事実に対して、各人が示す反応も、各々異なるようです。街頭に棄ててある猫の死骸を見て、胸がむかむかする人もあれば、面白そうに覗きこむ人もあり、また、つまらんと、唾もひっかけない人もあり、けたけた笑う人もあります。

つまり、各々の人間は、自分を作りあげた条件によって縛られ、よほどのことがない限り、それから逃れ出られないかもしれません。従つて、考えること・見ること・感ずることの一切が、各人各様であるとも言えます。こう考えますと、人間同士がお互いに完全に判り合えるという幸福は、厳密に言つて、ないことになります。つまり、太郎は次郎に決してなれず、花子は春子には絶対になれないというわけなのです。そして、個人間には、越すことのできない深い溝が、あぐりと、黒い大きな口をあけていることになります。人間の孤独というものは、こうしたところにも感ぜられるようです。しかし、こうした人間の孤独を乗りこえて、何とかして、他の人間と共通のものを持ちたいと願うのが、^{けだもの}獣にはない人間らしい営みだと私は信じています。ですから、たとえ私がフランス文学を、ど

のように曲解してしましようとも、中世から現在にいたるまでのフランス文学者という無数の人間を、私は私なりに判りたいと願うのは、別に恥ずることはないかもしれない。ただ恥じねばならぬのは、度を越えた曲解がある場合と、私が持つ術もない問題を取扱った作家に対する浅薄な理解或いは無知を、自ら意識しない場合とでしょう。そして、私の「曲説」が同学の先生方や読者の方々によって補正されて、なるべく正しい姿になることがあったら、私の願いは達せられることになります。

「曲説」である以上、「正説」とはかなり異つたものになり、いわゆる私見的なおしゃべりが多いこともやむをえません。どう考えてみても、他人様に十分説明する能力がない事項までを無理に説明したらしいような気がしてなりません。現在フランス文学・語学の教師ということになっている以上、フランス文学を、中世から二十世紀まで、また、フランス語を、同じく中世から二十世紀まで、全部くわしく心得ねばならぬということは理想ではありますが、私がフランス人ではなく日本人であるという根本的な条件以外に、個人的な条件・限られた能力・限られた生命しか与えられて居らぬ私は、いくつかの重大な文学的問題と、いくつかの重大な時期や作家とについては、全く触れることができませんでした。

本書を私に書かせる計画を抱いた旧友神吉晴夫氏は、もっと正確で、もっと完全な「正説」フランス文学史を、恐らく期待して居られたのではないかと思います。ですが、できあがつたものを見て、あてがはずれたので、しかたなく「へそ曲がり……」という題にされたのでしょうか。神吉氏は、大学で机をならべて、辰野隆先生やアンリ・アンベルクロード先生の授業を受けていた時代に、いんちき秀才面をしていたかもしれない私を買いかぶり、しかも現在、四・五等教師にしていただいて、背伸びをしているだけの私を、更に買いかぶって、大それた企画を立ててしまわれたように思います。しか

し、神吉氏といえども、人の子、やはり「判るものしか判らなかった」のでした。そして、同氏に勧められて、できあがったこの書物は、このような身勝手な、びっこをひいた、穴ぼこだらけのものになってしまいました。その点、神吉氏は、人を見る明あきはないことは確かですが、同時に、友誼ゆうぎに厚い人だとは思っています。

本書が成るに際し、神吉氏を初めとして、カッパ・ブックス編集長伊賀弘三良氏や、渡辺英幸氏に、様々な御迷惑をおかけしてしまいました。これは、残り少い一生ながら、忘れられぬ思い出となるでしょう。

——今日もまた、湯船の肌を撫なでつつも

この珍妙な俳句めいたものにこめた心は、右記の三人の方にしか判っていただけますまい。

一九六一年八月

註 この「俳句」にでてくる湯船は、本書の印税の前貸しでつくられたものです。(神吉)

自己紹介（一九六一年）

来年停年教授として、「老齡その任に耐えなく」なり、東京大学を退くことになっている以上、私の年齢のことは、記すまでもないだろう。恩師辰野隆先生、鈴木信太郎先生のお引き立てによって、東大の教師にさせていただいたが、一、二度ほど辞職したくなった。もちろん、わが身のほどを省かえりみてのことである。そのたびご

とに、先生がたは、「傲慢な考え方だ」と、私を叱られた。当時、この訓戒の意味は、よくわからなかったが、少ししてからわかったような氣になった。つまり、下根不敏な私のごときは、「東大教授の文学博士」とかいような袴かみしもをつけた肩書や称号がないと、世間からは、なにもひっかけられないということがわかったのである。少なくとも辰野先生は、大体こうしたことを、こっそりと洩らされたことがある。東大教授として、私が、背伸びをしながら今までやってきたことは、いくら欠点があろうとも、私の能力に限界がある以上いたし方ないし、先生がたに咎とがめられても、これまた、いたし方ない。先生がたも、はじめから大体を見通しておられた以上、やっぱりそうかとつぶやかれるだけだろう。しかし、本書のごときものを、私が書いてしまったについては、おそらくたいへんご不満だろうと思っている。しかし、停年後、少し暇ひまになったら、もっと勉強して、あらためて最後の卒業論文と学位論文とを書き、先生がたに提出するつもりである。